

『全人的いやしへのアプローチ: Part II』

—キリストのいやしの今日の意味を求めて—

2015年3月卒業

関西聖書学院 伊佐治 洋平

『全人的いやしへのアプローチ: Part II』

－ キリストのいやしの今日的意味を求めて －

KBI 関西聖書学院
2012年度入学 伊佐治 洋平

要旨

この論文は、キリストの「いやし」について、福音書に記された「いやし」に関する記述から、キリストのいやしが何をもたらしたかを考察し、「いやしとは何か」また、「今日の教会におけるいやしのミニストリー」はどうあるべきかを考える試みである。

「いやし」とは、それを必要としている人が、「神が本来意図された状態に回復されること」を指す。キリストのいやしは、医学的な視点から見た肉体や精神の「治癒」にとどまるものではなく、個人の存在全体、さらには社会、共同体との関わりにおける「社会的な回復」を含む“全人的いやし”である。そしてキリストが私たちにもたらす究極の「いやし」は、人がキリストの贖罪によって罪が赦され、新しくされること、すなわちたましいの救いである。この地上のからだで永遠に生きる人は一人もいない。その意味で、完全ないやしを経験するのは終末においてである。

神が今日、地上において「いやし」の働きをされるとするなら、どのような方法を用いられるだろうか。20世紀のペンテコステ・カリスマ運動および第三の波で強調され、さかんに行われてきた「いやしのミニストリー」の方法を検証し、今日の教会においてどのような「いやし」へのアプローチが求められているのかを考察する。

「いやし」は人の熱心や信仰深さによってもたらされるものでもなければ、キリストの贖罪の結果として当然与えられるというものでもない。「いやし」は愛とあわれみという神のご性質を基盤としている。いやしの主権は神にある。教会は、その神のあわれみの心に合わされて、人々に寄り添い、個人の、あるいは共同体の必要に応じて行く時、「いやし」を通して現代におけるキリストの役割を果たすことができる。

※なお、本稿では、「癒し」と「いやし」を意図的に区別して用いている。漢字表記の「癒し」が、医学的な病気、疾患の「治癒」をイメージしやすいことを考慮し、ひらがなの「いやし」という表記を用いることで、もっと広範囲の「いやし」の意味をもたせたいとの考えに基づいている。ただし、参照および引用文についてはできるだけそのままの表記を用いている。

目次

第1章 はじめに	4
第2章 いやしとは何か.....	7
2.1 保守とリベラルの癒しの解釈と問題点.....	7
2.2 治癒と癒し、疾病と病い.....	8
2.3 いやしの定義.....	9
2.4 「現代の病い」と全人的いやしの必要性.....	10
2.5 キリストのいやしがもたらしたもの	11
第3章 いやしに関する諸問題.....	12
3.1 奇跡を求める欲求.....	12
3.2 神か医者か	13
3.3 カリスマ運動におけるいやしの評価.....	16
3.4 贖罪の中にいやしは含まれるか.....	17
3.5 苦難の意味	18
3.6 エリクソンのまとめ.....	20
第4章 おわりに	21
参考資料	22

第1章 はじめに

1990年代、日本のキリスト教会にいわゆる「第三の波」と呼ばれる聖霊運動が急速に波及し、「力の伝道」や「霊の戦い」などのセミナーが各地で開かれ、しるしと不思議のともなう伝道こそ、これからの日本の宣教の鍵を握ると期待されていた¹。私がキリスト者になったのはそんな時代のただ中であり、洗礼を受けた教会はまさに、第三の波を積極的に受け入れ、しるしと不思議のともなう聖霊の働きを教会理念に取り入れた教会であった。当時、「いやしのための祈り」は教会においては日常の光景であり、誰かがいやしを必要としていれば牧師が、あるいはいやしのミニストリーの訓練を受けた信徒によるチームが手をおいて祈るのが当たり前だった。そして、実際数多くのいやしを私たちは見聞きしたのである。

それから二十年余りが経過したが、日本の教会はどうなったのか。日本宣教にパラダイム・シフト(世界観の転換)をもたらすとまで期待された「現代のしるしと不思議」を推進する運動は、日本の福音宣教に革命的な何かをもたらしたのだろうか。現在の日本の教会の姿を客観的に見るならば、「しるしと不思議のともなう伝道」、とりわけ「いやし」や「霊の戦い」という働きに関して言えば、90年代のように大きく取り上げられることはなくなったように思われる。それはそのような働きが教会からなくなってしまったのではなく、それが一部の教会では「当たり前」のこととしてなされるようになったということだろう。しかし、キリスト教会全体を見ると、しるしと不思議のともなう伝道は、今のところ、かつて期待されたような実質的な結果をもたらすことはなかったようである。

私自身は、神は今日でも奇跡的²な「いやしのみ業」をなさると信じている。そして、日本という国の文化脈においては、しるしや不思議、とくに「いやし」の働きが、教会において福音宣教のためにもっと用いられるべきだと考えている。世界中の教会成長を研究したドナルド・A・マックギャブランは、世界の教会成長が、しばしば神の癒しの運動に関連していることを発見し、神癒は神が人々を救い主への信仰へと導く一つの方法であると述べている³。日本の多くの宗教が「病気の癒し」を掲げ、実際多くの人々がその「癒し」を求めて、実態のないむなしい偽りの宗教に入信している。生けるまことの神を、創造主なる神を礼拝していると標榜するキリスト教会が、苦しみの中で救いを求める人々の必要に応えることができないことは憂慮すべきことではないか。もちろん、神が本当に望んでおられるのは人々の「霊魂の救い」であり、罪ある人間がキリストによって新しく生まれ、永遠のいのちを受けることこそ最大の「奇跡」である。一時的な「病気の癒し」は神の恵みのほんの一部ではない。しかし、神の国が地上にもたらされることが教会の使命であるならば、「いやし」のミニストリーによって、苦しむ人々に「癒し」がもたらされ、それによって救い主を信じる人々が多く起こされることは、神のみこころにかなうことである思うのである。

¹ 尾形守『聖霊の第三の波とリバイバル』ホープ出版(1995)を参照

² 「奇跡(奇蹟)」とは、自然の法則を超えた、神の超自然的な介入による驚くべき出来事と定義する。

³ ドナルド・A・マックギャブラン「神癒と教会成長」C・ピーターワグナー編集『現代のしるしと不思議』、生ける水の川(1992)、116-117頁

神学校入学後、神の導きによって、岐阜の母教会から派遣され、神戸の単立教会で奉仕することになった。そこに生まれつき全盲の男性(以降 A さんと呼ぶ)がおられる。彼との出会いが、私に「いやし」に関する概念をもう一度考え直すきっかけを与えてくれた。最初 A さんにお会いしたとき、私の心に浮かんだのは「かわいそうな方だ」という感情であった。そして、神の奇跡のないやしが今日もあると信じている私の心に次に浮かんだのは、「この人の目が癒されたらどんなに良いだろうか」という思いであった。しかし後に、この思いの「矛盾点」が浮き彫りにされてくることになる。私が単純に「癒されるべき障害」だと思っていたものは、A さんにとっては「生まれつきのそのままの自分自身の特徴」であり、A さんの日常生活は、白杖や点字の書物、音声ガイドやヘルパーの助けが必要であるという違いを除けば、晴眼者とまったく変わらないのである。それどころか、いろいろな視力障害者の会の責任ある役を引き受けている A さんは、教会の他の誰よりも精力的に对外活動をされ、全国を飛び回っている。あるとき A さんと神のいやしについて語り合った時、彼はこのように言った。「私にとっては、これが神が創造された姿であり、全盲であっても、私はこのままで神様の栄光を現していると思っています。」続けてこういわれた。「かつていやしの集会に参加した時、『盲目が癒されるように』という祈りに違和感を覚えました。私はこの姿で生まれたのです。」A さんの言葉が私の「いやし」に対する概念を揺さぶった。そして、かつて A さんを見て、「かわいそうな、癒しが必要な人」という見方をした自分を恥じたのである。私にとって A さんは、尊敬するキリスト者の先輩であり信仰の友である。彼がもつ障害は、少なくとも私との関係においては何の影響もおよぼさない。そこに「癒し」の必要性を見出すことはできない。いったい「いやし」とは何か？生まれつき全盲であるという障害が、A さんにとって「いやし」の対象ではないだろうという事実は、私たちに何を教示しているのか。「途中で失明した人はまた考え方が違うと思いますけど。」そう A さんは付け加えた。

視覚障害のいやしで思い出される聖書物語の一つは「バルテマイのいやし」であろう。彼にもたらされた「いやし」はいったい何だったのか。キリストはなぜ彼の目を癒したのか。単純に盲目の目が癒されたのか、それとも別の目的や意味があったのか。A さんとの出会いを通して、「キリストのいやし」の意味をもう一度見つめ直したいと思ったのが、この論文を書くきっかけである。何か明確な答えを求めているのではない。しかし、「病気は癒されるべきもの」、「病気や障害が癒され、苦しみから解放されることこそ神の栄光のあらわれである」とただ単純に信じていた私にとって、「いやし」の意味を問い直すことはとても重要な意義のある作業である。キリストはなぜいやしたのか、なぜある時はいやさなかったのか、キリストのいやしは、本人や周囲の人々に何をもたらしたのか、キリストのいやしは何を含み、何を含まないのか？

ある一冊の本に出会った。キャシー・ブラック著『癒しの説教-障害者と相互依存の神学-』である。数多くの障害者に関わった牧師、教師として、また自らも身体に弱さを持つ者として、ブラック教授は伝統的な神学やキリスト教会での説教が、障害を持つ人々や慢性疾患に苦しむ人々を取り巻く現状と苦難を癒すどころか、かえって差別し、抑圧し、排除していると訴え、それに代わるものとして、「相互依存の神学」というものを提唱している。私はブラック教授のすべての考えに同調する者

ではない。また、本稿は説教についての論文ではなく、「いやし」そのものに注目するものである。しかし、この本を通して実に多くのことを考えさせられた。ブラック教授が本の冒頭で投げかけている「伝統的な癒しの説教」に対する問いは、今まで見聞きしてきた「いやしのミニストーリー」に対する私の問題意識と重なる部分が多い。

「今日、われわれは「癒し」という言葉を聞いてしばしば困惑を覚える。われわれは、苦難を覚えている人々の人生に癒しをもたらしてくれる神の力を確証したいと願っているが、治癒だけに焦点を置き、他人の苦難を自分たちの力を示し、利益を上げるための道具と考えているような信仰治癒師たちとは関係を持ちたくないとも願っている。一方で、癒しを通じた伝道は、そのはじまりから教会活動の一部であった。人間がいるところではどこでも、様々なレベルの苦難があり、そして苦難があるところには、癒しの必要性があることをわれわれは知っている。しかし、いったい「癒し」とは何を意味するのだろうか。癒しと治癒の間にはどのような違いがあるのだろうか。一世紀のパレスチナ・ユダヤ人たちの文脈では、癒しには、どのような意味があったのだろうか。様々な障害をもった人々に対するイエスの行為は、彼らにどのような影響を与えたのだろうか。⁴」

新約聖書のイエスのいやしがもたらしたものは、単なる病気の「治癒」でなかったことは、その癒しの出来事がもたらした結果を見れば明らかである。聖書のいやしの物語は、それが病いのいやしであれ、悪霊追い出しであれ、イエスがいやした人々に対してなんらかの「解放」と「回復」をもたらす出来事であった。ブラック教授は、イエスのいやしは、彼らの宗教的・世俗的・家庭的領域に完全に参加できるようになることにその中心的な意味があると述べている。この考えは、私にとって新しいものであった。これまでは、最初に身体的な「癒し」が、それ自体を目的としてなされ、その当然の結果として、様々な社会的回復がもたらされたのだと思っていた。しかし、イエスははじめからそのような広範囲にわたる目的を持っていやしの業をなさったのではないか。この論文では、「キリストのいやし」が、単なる病気のあるいは障害の、医学的な「治癒」にとどまらないだけでなく、はじめからもっと高次の目的をもってなされたのではないか、という仮定に基づいて論考を進めていく。

⁴ キャシー・ブラック、『癒しの説教』, 教文館 (2008), (Kathy Black, 1996, “A Healing Homiletic Preaching and Disability”, Abingdon Press), 20 頁

第2章 いやしとは何か

本章では、「いやし」とはいったい何を意味するのかということを考える。まず、2.1 では、保守とリベラルの癒しの解釈の違いと問題点を指摘する。続く、2.2 では、「いやし」という言葉の持つ二つの意味を確認する。2.3 ではそれらの意味をふまえて、「いやし」という言葉の広義に解釈した場合の定義を「その人が神が本来意図された、正常な状態に戻されること」であると、マルコ福音書に用いられる動詞「ソーズー」の使われ方がそれを裏付けていることを見る。続く 2.4 で「全人的いやし」の必要性を、2.5 でキリストのいやしにこそ、その解決があると主張する。

2. 1 保守とリベラルの癒しの解釈と問題点

キリスト教は伝統的に障害者や慢性疾患を抱える人々をどのように考えてきたのか。ブラック教授は、数世紀にわたる癒しの物語の多様な解釈が、イエスの伝道が意図していた解放の効果を失わせ、説教に用いられている神学や言葉遣いが、障害者の共同体に対してしばしば意図しているのとは反対の影響を与えてしまうとして、以下のように述べている。

「神学的に保守的な立場とリベラルな立場の両方ともが障害者の疎外や抑圧に加担してきた。保守的な立場では、癒しを「治癒」とみる傾向がある。彼らは癒しの物語を文字通りに受け取り、それにしがたって、今日の障害者は、神との正しい関係を取り戻す「完全な」状態になるために、「治癒される」必要があると考える。説教での焦点は、イエスを高い位置において、癒されるべき人を低い状態におくことにある。このことは、もしある人が盲やろうであったり、マヒがあったり、あるいは「悪霊に取りつかれている」なら、その人には直す必要がある何か悪い部分があることを意味する。つまり、その人には罪があり、救いが必要で、その人の信仰は十分ではなく、悔い改めが必要なのである。

リベラルな立場では、癒しに対するもっと心理学的なアプローチが取られ、癒しによる伝道という概念は完全に避けられている。福音書における癒しの物語は隠喩的に用いられるか、あるいはその聖書箇所ですり上げるべき他にもっと重要な問題を語るために、癒しそのものはすり上げられない場合もある。その重要な問題とは、物語が書かれたときに筆者がその物語を通じて語ろうとしたことが何であったかということや、なぜ福音書の中の特定の場所にそうした物語が配置されているのかといったこと、また福音書を書くに当たっての著者の目標に対して、そうした物語にどのような役割があったのかといったことである。

どちらの立場でも、癒される人は、その聖書箇所の中での主題ではないし、自分自身の物語の主演ではないものとして取り扱われている。かれらは、別の事柄を伝えるために利用される対象となる傾向がある。このことが問題なのは、同様に今日の障害者たちも自分たちが対象として扱われていると感じるようになるということである。医療、教育、雇用、社会サービスといったわれわれの社会における基本的制度のすべてにおいて、障害者たちは、主体として何かに貢献する存在であるというよりは、対象として扱われている。⁵」

⁵ 前掲書 21-22 頁

障害者の観点から聖書解釈の問題点を述べたブラック教授のこの指摘は、私自身の「いやし」の理解の狭さを端的に指摘している。私がこれまで考えていた「いやし」は狭い範囲のいやし、言い換えれば医学的な病気の「治癒」(それは神のいやしの恵みの一部でしかない)にすぎないものであった。また、病気や障害を持つ人を見ると、その人自身と、その人が抱える病気や障害を別のものとして捉えるかわりに、「盲人」とか「がん患者」とか「悪霊つき」という言葉によって、病気や障害がその人の一部であるかのように見ていたのではないか。視覚障害をもつ A さんを見る時に、一人の完全な人である A さんと、目が見えないという障害を、分離して見ることなしに同一視してしまっていたという誤りである。

2. 2 治癒と癒し、疾病と病い

ブラック教授は、説教の中でこの「治癒(cure)」と「癒し(healing)」を交換可能な用語として用いたり、誤って用いることを問題視している。治癒(cure)は、疾病そのものが除去されていないにしても、少なくともその症状が除去された状態のことを指している。これに対し癒し(healing)には多くの意味が付与されており、例えば「癒しの音楽」「癒しの時」「癒しの礼拝」などと言う場合は、いずれも幸福や平安の感覚を引き出すが、必ずしも治癒を意味してはいない。この場合の「癒し」は、その人の人生のうちに幸福や慰め、支えや平安の感覚をもたらすものを指している⁶。

また、病気を理解し説明する方法としても、疾病(disease)と病い(illness)の二つを区別する。疾病(disease)は近代的な概念であり、それは「有機体の構造と／または機能における異常」に焦点を当てるもので、もっぱらある特定の個人のみに影響を与える。対して、病い(illness)はその疾病が社会的に認識可能な意味を与えられる、つまり、それらの症状が社会的に重大であるとされることである。疾病が「社会的に重大な結果」をもたらすようになると、それは「病い」となる。「病い」とは「社会的に価値を剥奪された状態であり、そこには病気にかかっている個人のほかにも多くの他者が含まれる」。つまり、例えばある人に軽い風邪の症状があるだけならばなんの問題も生じないが、インフルエンザにかかった場合は、より広い共同体、友人や家族もその影響をうけることになる。

ブラック教授によれば、聖書世界の人々にとっての関心事はこの「病い」であり、病いが共同体そのものに対して、また共同体の秩序や働きに関係して持っている影響に対して関心を寄せていた⁷。そういうわけで、聖書世界の共同体は自らを守るために清浄規定⁸、すなはち、神殿における礼拝を制限したり、汚れているとみなされる者たちを区別したりすることを含んだ法律を制定した。一世紀の聴衆たちに最も衝撃をあたえたことは、イエスはその文化的・宗教的境界線である清浄規定を踏み越えて、言い換えればタブーを犯してまで、ツアラアトに冒された男や、出血する女に共同体への回復をもたらしたことであり、それこそがイエスのされた「いやし」の本質であるということだ。

「今日、われわれは、成文化された清浄規定はもっていないかもしれない。しかし、われわれの教

⁶ 前掲書 69 頁参照

⁷ 前掲書 65-66 頁参照

⁸ 例えば、レビ記 21:17-23 では、障害者たちが祭壇に近づいたりすることが禁じられている。

会や社会には成文化されていない清浄規定が確かに存在している。⁹⁾とブラック教授は指摘する。教会は、ある特定の人種や、容姿や行動や障害や性的指向が受け入れがたいと思う人々に対して、いやしを提供するどころか、自らの共同体を守るために境界線を築いているということがありうるのである。その場合、いやしの必要性は、排除されている人自身でなく共同体の制度やあり方、あるいはそこに関わる人々の意識の中に見出されることになる。

2. 3 いやしの定義

ここで、いやしの定義について考えてみたい。「いやし」とは何か。私はこのように定義したい。「いやし」とは、広義の意味において、「ある人が神が本来意図された、正常な状態に戻されること」である。それは身体的な健康状態にも、精神的な健康状態にも当てはまる。また、究極のいやしが靈魂の救いであるという視点に立てば、霊的な健康状態(その人がどれだけ神の救いを確信しているかということ)にもあてはまると考える。また、この「いやし」は、先のブラック教授の区別で言えば、疾病(disease)にも病い(illness)にも及ぶものであり、治癒(cure)も癒し(healing)も含まれる。つまり社会的な立場や人間関係の回復も含むものである。

マルコ福音書の福音書のいやしに関わる用語を見ると、聖書における「いやし」の概念は時として広い意味で使われているようだ。河野(2008)は、マルコの福音書において使用される癒しに関する用語に関して、身体的な「癒し」と魂の「救い」の両方の意味を持つギリシャ語、「ソーザー」という言葉に注目して次のように解説している。

「マルコでは「癒す」という意味の動詞として、セラペウオーとイアオマイの二つが使われており、セラペウオーは5回(1:34、3:2、10、6:5、13)イアオマイは1回(5:29)、それぞれ使われているこの他「清める」という意味の動詞カサリゾーが、皮膚病の人の癒しの記事において3回(1:40、41、42)使われている。この三つに加えてさらにもう一つ、「救う」という意味の動詞ソーザーが、物理的な命に関わる癒しの意味で使われている。(3:4、5:23、28、34、6:56、10:52^{※1})。ソーザーは物理的な命を超えた宗教的次元での救いの意味でも使われており(8:35[x2]、10:26、13:13[x2]^{※2})、さらに、十字架の場面では、両方の意味が重ね合わされてアイロニーを構成するなど(15:30、31[x2]^{※3})、マルコ福音書においては決定的に重要な役割を果たしている。¹⁰⁾

※1

3:4(手の萎えた人:7) 安息日に律法で許されているのは…命を救うことか、殺すことか。

5:23(ヤイロの娘:10) 娘が直って、助かるようにしてください。

⁹前掲書 256 頁

¹⁰河野克也「マルコ福音書における癒しと救い—物語批評の視点から」、『福音主義神学39号』(2008) 26-27 頁参照,

5:28(衣に触れる女:11) お着物にさわることでもできれば、きっと直る。

5:34(衣に触れる女:11) 娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです

6:56(ゲネサレの病人:14) そして、さわった人々はみな、いやされた。

10:52(バルテマイ:20) あなたの信仰があなたを救ったのです。

※2

8:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。

10:26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」

13:13 また、わたしの名のために、あなたがたはみなの方に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

※3

15:30-:31

「おお、神殿を打ちこわして三日で建ててる人よ。十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」

また、祭司長たちも同じように、律法学者たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。

「他人は救ったが、自分は救えない・・・」

つまり、福音書における「いやし」の物語は、ただ単にある人の病気や障害が「治癒」したという事実を示しているのではなく、それ以上の「回復」「解放」の物語であり、キリストによる「いやし」は、その人に、神のもっと高次の目的である「救い」という概念を含むものを提供したといえることができる。

2. 4 「現代の病い」と全人的いやしの必要性

宇田(1993)は最近、病気観に一つの変化が起こっているという¹¹⁾。近年病気は外からだけくるのではなく、「一億総心身症」と言われるように、心身のアンバランス、心理的な原因から心理的な原因から起きる病気が圧倒的に多くなってきていることが分かってきたので、今日の医学はこの現実によりいっそう注目している。最近では、肉体的、心理的、社会的要素を含めた“全人的医療”が重視されるようになり、病気にかかった人々の苦しみを分かち合う「心温かな病院運動」や「患者の権利憲章」の作成などが注目されてきている、と紹介している。ストレス社会と呼ばれる社会構造の中で、現代に生きる人々は①自己の生きがい、自分の存在証明の喪失②他の人々からの疎外、共同体との無関係状態からくる自己疎外③偉大な目的や希望を持たない意味の消失、に苦しみ、それらは①心身症的症状②神経症的症状③行動障害④認知・思考障害といった症候に現れている。そしてそこから聞こえてくるいやしと回復と解決を切望する声は、現代の教会に対して切実な一つの“マケドニアの叫び”なる声となっているというのである。

¹¹⁾宇田進「全人(The whole person)のいやしへの接近」、『聖書と精神医学—全人的いやしへのステップ(共立モノグラフ No. 5)』、いのちのことば社(1993),8頁、14-16頁、23-24頁参照

2. 5 キリストのいやしがもたらしたもの

このような現代の「病い」に苦しむ人々の声に対し、私たちキリスト教会はそれを受け止め、積極的かつ責任をもって応えることができるのだろうか。その問いに対する答えは明白である。キリスト教会こそ、この叫びに真に応えられる存在である。なぜなら、キリストのいやしこそ、肉体的、心理的、社会的要素を含む問題に解決を与える“全人的いやし”だからである。福音書におけるいやしの物語におけるイエスの活動は、いやしを通して障害者や病気の人が共同体に再び統合されるという結果をもたらすものであった。

「イエスの治癒を伴う活動は、病気の人々を清浄へと、全人格的な存在へと回復させた。…聖なる共同体における完全で能動的な一員へと復帰させたのである¹²⁾」

ブラック教授によれば、イエスがしたことは、共同体によって設けられた社会的境界線を打ち壊したことであった。汚れた者というラベルを貼られて隔離されていたツアラアトに冒された人々は、家族や友人のもとへ戻り、神殿での儀式に参加することができた。あらゆる関係から疎外され隔離されて、出血とともに12年間生きた女性は、イエスに「娘」とさえ呼ばれ、再び共同体へと迎え入れられた。病いをもった人は、適切な「行為」ではなく、適切な「存在」のあり方へと回復された。こうした障壁が打ち壊されることで、病いに苦しめられていた人々の「存在」が再び肯定されたのである¹³⁾。

キリストのいやしがもたらすものこそ、先に述べた「現代の病い」に対して解決を与えるものである。キリストのからだなる教会はそのような「全人的いやし」を人々に提供する存在にならなくてはならない。そうであるならば、私たちの求められるいやしのミニストリーは、ただ単に肉体的な病気が治癒するように祈ることだけではなく、その人の人生に重大な影響をもたらしているあらゆる領域の事柄に及ぶものでなければならない、と思うのである。

私の知人ががんを患う年配の女性がいる。彼女は少しでも長く生きたいと辛い抗がん治療を続けておられるのだが、問題は、その理由の一つが、信用できない親族に大切な財産を奪われるかもしれないという恐れにあることだ。この場合、彼女が必要としている「いやし」とはなんだろうかと考えさせられる。だれもが病気が癒されることを心から願う。しかし彼女が本当に必要としている「いやし」は、病気の治癒ではなく、人間関係の回復や、苦々しい思いからの解放ではないか。近年、医療の分野でも「緩和ケア¹⁴⁾」の重要性がますます叫ばれている。キリストのいやしをモデルとする時、私たち教会のいやしのアプローチは、もっと柔軟で多様なものでなければならないだろう。私たちは、その人の「全人的いやし」を願い、祈り、愛を持って行動する者であるべきだ。

¹² John J. Pilch, “Sickness and Healing in Luke-Acts,” Jerome Neyrey 編 *The Social World of Luke-Acts* (Peabody, Mass: Hendrickson, 1991)

¹³ キャンシー・ブラック, 前掲書, 72 頁参照

¹⁴ 緩和医療 (かんわいりょう, palliative medicine) または緩和ケア (palliative care) とは、生命 (人生) を脅かす疾患による問題に直面している患者およびその家族の QOL (Quality of life, 生活・人生の質) を改善するアプローチである。苦しみを予防したり和らげたりすることでなされるものであり、そのために痛みその他の身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題を早期に発見し、的確なアセスメントと治療を行うという方法がとられる (WHO の定義文 2002 より)。Wikipedia より引用

第3章 いやしに関する諸問題

2章では、キリストのいやしとは何かを考察してきた。本章では、私たちはそのような「全人的いやし」を受け取ることを困難にしていると思われる諸問題を取りあげる。3.1 では、奇跡的ないやしを願う祈りのほとんどは「治癒」に焦点が当てられているという問題を取り上げる。3.2 では、神か医者かという問いの問題点を、続く3.3、3.4 では、「いやし」が信仰と結びつけられる時に生じる問題や、ペンテコステ・カリスマ運動における「いやし」についての聖書解釈の問題点、特にいやしの基盤をキリストの贖罪に求める解釈を、カルペッパーとエリクソンの視点から考察する。3.5 で苦難の意味について考え、最後に3.6 で贖罪といやしの関係についてのエリクソンの見解を紹介する。

3.1 奇跡を求める欲求

今日、私たち自身の人生に病いが生じるとき、最初に持つ欲求は、その病いという問題に対して何かしらの奇跡的な解決がなされることである。信仰によって、神がこの問題に介入して下さることを願って祈る。ブラック教授は、ここで一つの問題点を指摘する。それは奇跡的な解決が求められる時、それはほとんど常に「いやし」にではなく「治癒」に焦点が当てられているということである¹⁵。共同体が誰かを治癒することを意図していやしのミニストリーを行う時に、何が生じるのか。人々が奇跡的な治癒を心から期待して熱心に祈り、その人の上に手を置いたがそれが起こらない時、何が生じるのか。しばしば会衆は落胆し、時には幻滅する。この時、障害者たち、とりわけ近代の医学では治癒できない障害者たちにとって、落胆と幻滅は拒絶の感情と結びつけられるという。「治癒」を強調することは、共同体が彼らをそのままでは受け入れず、彼らが他の人々と同じ様になった時にだけ完全に受け入れるだろうということを暗に意味している。祈る側がどれほど善意で行っていても、これは障害者にとって辛い経験となりうる。人々は単純に障害者たちにとって最善を求めている。そして、彼らの頭のなかにある最善のこととは身体的な「完全さ」すなわち「治癒」であるため、彼らは奇跡のために祈る。しかし、「完全さ」とは人それぞれの価値観によって決定されるものである。私たちが「完全だ」「最善だ」と信じていることや、私たちが「いやしだ」と思っていることは、慢性的な障害を持つ人が思っていることと同じではないかもしれないのだ。この勘違いは、まさに私自身がAさんに対して抱いていたものである。善意だと思っていたその考えは、実はAさんのもつ障害を、Aさん自身の存在の一部として容認していないという態度であったのだ。それは、無意識のうちにAさんを共同体から排除する考えであると言える。

しかし、だからといって奇跡的な治癒をはじめから否定する必要はないと考える。大切なことは、いやしを必要としている人が、具体的に何を求めているかということに耳を傾けることである。何が必要かだれの目にも明らかであったバルテマイに対して、イエスはあえてこのように質問をされた。「わたしに何をしてほしいのか。」(マルコ 10:51)バルテマイは、彼にとって何がいやしであるかを、自分で決定したのである。今までのいやしのミニストリーでは、私たちはしばしば、自分ではどうす

¹⁵ 前掲書 70 頁参照

することもできない人と思いついでいる他人に代わって決定してきたのかもしれない。実際には、私たちがいやしだと思いついでいることが彼らにとっては抑圧でしかなかったとしても。一方、イエスはバルテマイに自分で決めさせることで、彼が自分自身のいやしの物語に主体的に参加させ、重要な役割を与えたのである。私たちのミニストリーは、独りよがりな、善意の押しつけではなく、一人ひとりが望む変化をもたらすために、その人に寄り添い、ともに神に祈り求める者になることが求められているのではないか。

ブラック教授は、多くの障害者たちが自分たちの実存的な現実を、死は当然のこととして、苦難とも同一視していない、と述べる。自分が置かれている条件のもとで完全に満たされて生きることを非常によく学んだ人には、ある人にとって残酷だと思えることを、同じように残酷だとは思わないことがありうるのだという。例えば、ろう者である両親はしばしば、生まれてくる子どもがろうであると喜ぶ。共通の言語を持つことにより、コミュニケーションすることがはるかに容易になるからである。ろう者である子どもは豊かなろう文化の中で成長していく。外部の世界からの差別を除けば幸せな生活で、ろう者であることに対して実質的にはなんの苦労もない。しかし、ろうの子どもが健聴者の両親のもとに生まれ、互いに成長しようと思うと、両親の言語が子どもに容易に伝わらないために、両親にとっても悲惨なことになることがあるという。つまりこの世界においては、すべての人は互いにリンクされており、相互依存している。そして、神は互いの相互依存関係の中心にいて、われわれ一人ひとりにとって可能な幸福を願い求めておられる。相互依存している信仰共同体から差し伸べられ、触れてくれるいやしの手を通して、神はわれわれの人生を転換することができるというのが、ブラック教授の確信である。¹⁶

3. 2 神か医者か

病気になったとき、医者に行くことは神のみこころにかなったことだろうか。「わたしは神の癒しを信じるから医者には行かないし、薬も飲まない。」という人がいるが、はたしてこの問題は神か医者かという二者択一にあるのだろうか。高木・シスク(1996)は、何が神の「いやし」をもたらすかについて、リチャード・メイヒューの著書を引用して次の三つ(1神がいやされた 2 医学的治療が効果を発揮した 3 体の中の自然の治癒力・回復力)そのすべてが神によってもたらされるいやしであると述べている¹⁷。

さらに、自然のいやしと超自然的のいやしの違いについて次のように述べている。「私たちはしばしば「神のいやし」というと、超自然的ないやしだけを考えがちですが、それは正しくありません。・・・もし病気になったことがあり回復したのなら、神によつていやされたのです。ですから超自然的ないやしであっても、自然的ないやしであっても、すべてのいやしは神のいやしであり、

¹⁶前掲書 47-58 頁参照

¹⁷高木慶太,テモテ・シスク,『今日における奇蹟 いやし 預言』,いのちのことば社(1996)148-149 頁参

神に感謝をささげなければなりません¹⁸。」

聖書のどこにも、医者にかかり薬を使うことが不信仰の表明とは書かれていない。むしろイエスはマルコの福音書 2:17 で医者的重要性を認めている。神がこの世界のすべてを支配しておられるお方であることからすれば、生まれつき備えられた自然治癒力も、医者による治療や薬の処方も皆、神の主権の中で用いられる神の恵みであると考えるのがもっとも自然なことに思われる。しかし、多くの「奇蹟」を信じるクリスチャンは、この医者か神かという問題にとらわれているように見える。それはしばしば、ひとしきり祈った後で医者にかかる時に感じる、「うしろめたさ」のような感情として認識されるものである。

内村鑑三の著作に、「神癒」についての興味深い問答がある。これを読むと、質問者は、神癒を信じる者は医者にかかるべきではない、との考えを持っている。その質問に対する内村鑑三の返答は実に明解で、的を射たものである。

「問 先生、あなたは神癒をお信じになりますか。

答 もちろん信じます。神がお造りになったこの身体です。神がその病を癒せないわけはありません。キリストは今もなお、生きておられます。彼の能力に、昔も今も変わりはありません。

もし御心に適うなら、彼は今でも昔のように、生れつきの盲人の目を開くことができます。死んだ人を生き返らせることができます。

問 それでは先生は、何故、病気に罹られた時に、医者におかかりになるのですか。

答 医者にかかるのが、神の御心だと信じるからです。私は、そのことについては、聖書の言葉によるまでもなく、私の常識によって決めます。

問 しかし聖書には、「エホバは汝のすべての疾(やまい)をいやし」(詩篇 103 篇 3 節)と書いてあるではありませんか。またヤコブ書には、「汝等の中誰か病(や)める者ある乎。あらば教会の長老を招くべし。彼等主の名に託(よ)りて其人に膏(あぶら)を沃(そそ)ぎ、之が為めに祈らん云々」(5 章 14 節以下)と書いてあるではありませんか。その他、キリストが癩癩(てんかん)、中風、血漏その他全ての病を癒されたことを、聖書は沢山書き記しているではありませんか。

答 その事は、私も承知しています。私も、神に依らずには如何なる病も決して癒すことは出来ないことを固く信じます。エホバは、私達の全ての病を癒す神です。

しかしながら、エホバは私達の病を、どのようにして癒されるか、それが問題なのです。

神が病を癒される方法は、一つでは足りません。いわゆる奇跡を以てする癒だけが、医療の唯一の方法ではありません。医術を以てするのも、神が私共の病を癒される一つの方法です。

そして今日のように医術が比較的に進歩した時に当たっては、神に感謝しながら、これを使用するのが、常識に適った信仰の道であると思います。

…(中略)…

問 あなたの御説を伺うと、何だかわかったようで、少しも分かりません。あなたは、神癒を信じてい

¹⁸前掲書,103 頁

らっしゃるようでもあり、また信じていらっしゃらないようでもあります。この問題に対するあなたの御態度は、どうも明瞭を欠いているように思われます。

答 そうおっしゃるならば、この問題に対する、私の態度をあなたに明白に申し上げます。私は、神を信じる上で、神癒なるものに余り重きを置きません。あなた方が唱えられる神癒なるものは、私の信仰箇条とはなりません。私は、神が私の祈禱を聴いて、私の肉体の病を癒して下さろうが下さるまいが、それによって神の私に対する御心のほどを判断しません。私は、私の肉体の病を癒されようとして、キリストを信じたものではありません。私は、私の靈魂を救っていただくために、彼の弟子となったのです。私の肉体は、罪の故に既に死んだものです(ロマ書 8 章 10 節)。これは一度癒されても、終には必ず死すべきものです。

甦らされたラザロでさえ、終には死んでしまいました。キリストに肉体の病を癒されることは、靈魂の罪を赦されるような、大きな救いではありません。私は、私の靈魂さえ癒されれば、私の肉体はどうなっても良いのです。

靈魂のためを思うと、病は少しも悪いことではありません。そうです。多くの場合においては、病は恵みです。重い病に罹った結果として、罪の縄目から救われた人は、沢山います。

ある時は、病は実に歓迎すべきものです。感謝すべきものです。病を全て悪事とだけ解する者は、未だ深くキリストの恩恵を味わったことのない人であると思います。祈禱で病が治るとするならば、キリスト教は速やかに俗化してしまいます。疾病(しっぺい)医癒(いゆ)の願いは、決して無私無欲な願いではありません。病を癒されたいという願いは、誰にも有る願いです。そして、もしキリストが肉体の医師であると分かれば、利欲一方の官吏でも、商売人でも、争って彼の膝もとに来るでしょう。ちょうど浜口某なる者が、金剛力によって全ての病気を治すと唱えた時に、都下の衆愚が争って彼の許に走ったようなものです。キリストは万物の造主ですから、もちろん容易に肉体の病を治すことが出来ます。しかし、人の靈魂を救い、彼等を永久に活かそうとするのが彼の目的ですから、彼はある特別の場合においてでなければ、肉体の病を治されません。彼はもし、靈魂を救うために肉体を癒す必要があると御認めになれば、これを癒されます。しかしその他の場合においては、これを癒されません。キリストが肉体の病を癒されるからと言って彼を信じ、癒されないからと言って彼の恩恵を疑うようなことは、キリストを信じる道を知らない者がすることです。ある大臣がキリストの許へ来て、カペナウムに下って、その子を癒して下さるように請うた時に、キリストは彼に問われました。「汝等休徴(しるし)と異能(ことなるわざ)とを見ずば信ぜじ」(ヨハネ伝 4 章 48 節)と。肉体に医癒の恩恵を受けたという理由でキリストを信じるのは、彼を喜ばせ奉る道ではありません。私共は、私共の靈魂において、キリストの偉大な能力(ちから)を感じるべきです。

そしてここに、これを感じさえすれば、私共は、肉体が癒されるかどうかにかかわらず、彼に感謝して止みません。「彼(神)我を殺すとも我は彼に依頼(よりの)まん」(ヨブ記 13 章 15 節)と言うのが、本当の信仰です。使徒パウロも、ある苦痛から免れることを神に求めました。しかし神は、パウロのその祈禱を聴き入れて下さりませんでした。その時パウロはどう言いましたか。コリント後書 12 章 7 節以下を読んでごらんください。これが本当のキリスト教的信仰です。肉体の治療にあまりにも重きを置いて、神癒を信じるから信仰が強いと言い、信じないから信仰が足りないと言うようなことは、甚だ低い、かつ浅い信仰であると思います。私は、私の信仰を、その程度に留めておくことを望みませ

ん。私は、ヨブやパウロと共に、私の肉体の病を癒されなくても、篤(あつ)く神に依り頼む信仰に達したいと思います。

問 御説あるいはごもっともかも知れません。しかし、あなたの御説は何だか学者の説のように聞こえて、私には未だ充分にこれを受け入れることが出来ません。

答 多分そうでありましょう。私は今、あなたの「神癒」に関する御信仰を壊そうとするのではありません。ただ、今後私が病に罹った時に、私が医師の援助を求めても、そのために無信仰だと言って私を責めないで下さい。

問 それは、委細承知しました。

答 そうして下されば、私はこの問題について、これ以上あなたに何も申し上げません サヨナラ¹⁹

3. 3 カリスマ運動におけるいやしの評価

「医者か神か」という誤った考えはどこから来るのだろうか。カルペッパー(1978)は、伝統的な福音主義者の立場からカリスマ運動を検証した優れた著書『カリスマ運動を考える²⁰』で、カリスマ運動において「いやし」がどのように強調されてきたかを的確に解説し、その問題点も指摘している。

カルペッパーは、カリスマ運動におけるいやしのミニストリーの方法について、典型的な二種類のアプローチがあると説明している²¹。その第一のやり方においては、次の三つのステップがとられるという。「すべてのいやしは神のみこころであると信じること」「イエスがすでに贖罪の業において完全ないやしをなさっていると主張(イザヤ 53:5、第 I ペテロ 2:24)」「信仰によってすでにいやしが与えられたと信じて神に感謝すること」が常に強調される。他方、第二のやり方では、祈りによるいやしを、医学によるいやしと対抗するものとはせず、神のいやしにはさまざまな方法があると認めている。神は健康を望んでいるとするが、絶対視はしない。罪と病気の関係性は認めるが、その取り扱いについては決まりきった公式に当てはめることはしない。信仰の重要性は強調するが、信仰がない場合でも神は祈りにこたえていやして下さることもある。この場合の信仰はイエスキリストに揭示された愛の神への信仰である。神のいやしは神秘の業である。いやしを行われる神を賛美するが、いやされない場合も多くあることを認め、病人の願い通りにならなくても、信仰の不足のせいにしていないことが強調される。²²

カルペッパーは、このうち第一の方法についての問題点を指摘して次のように述べている。「いやしに対する第一の方法は、実際に健康が回復した人にとってはよいのですが、いやされなかった人には絶望と罪意識を植え付けることとなります。いやしが実現しない場合、患者がまだすべ

¹⁹内村鑑三、『内村鑑三全集14』, 岩波書店(1981), インターネットサイト「内村鑑三の著作を現代訳する試み <http://green.ap.teacup.com/lifework/>」より引用。

²⁰ R.H.カルペッパー, 『カリスマ運動を考える』, ヨルダン社(1978)

²¹ 前掲書 235-237 頁参照

²² カルペッパーは第一の方法を取る人物の代表としてケネス・ヘーゲンを、第二の方法を取る代表的人物としてフランシス・マクナットをあげている。ジョン・ウィンバーをはじめとする、後の第三の波のグループは後者に近い方法をとっているといえる。

ての罪を告白していないからだとか、信仰が足りないからだなどと理由があげられるのです。一方、いやしが起こると、いやしを行う伝道者はいやしに必要な信仰を与えたということで高く評価されます。いやされないのは、患者の方でいやしの回路をつなぐことができないからだとか、すべて患者の責任になります。このようなやり方では、患者に信仰を必死になって作り出させたり、なおっていないのがはっきりとしているにもかかわらず、いやされたと主張させるようなこととなります。このようなやり方からは当然のこととして、信仰があるならば医療に頼らないはずだという考え方が出てきます。そして、医療によるいやしに代るものとして、祈りによるいやしをとることになります。本当に信仰があるのなら医療を止めるべきだということです。このようなことはときどき実際に見られるのであって、みじめな結果に終わっています。²³」

カルペッパーが指摘し、問題としているこの第一の方法は、現在のペンテコステ・カリスマ派の集会において依然として行われているように見える。その間、どれだけの人が「信仰のない者」のレッテルを貼られ、失望と落胆を味わってきたかと思うと、いたたまれない気持ちになる。私たちは第二の方法から学ばなければならない。すなわち、たえず私たちに注がれている神の愛と恵みに「いやしのミニストリー」の基盤を置くのである。そうすれば、神が奇跡的ないやしをなさなくても、たとえいやしが起こらなくても、その人は神の愛の臨在によって、なおも神に近づけられていくだろう。いやしの主権は神にある。私たちの祈りの姿勢は、「神よみこころを教えてください」「神よみこころをなしてください」である。

3. 4 贖罪の中にいやしは含まれるか

カルペッパーは、第一の方法をとる人たちのもう一つの問題は、特定の聖句(マタイ 8:17、イザヤ 53:4、I ペテロ 2:24)から、いやしの基盤をイエスの贖罪の死に置いていることだと述べている²⁴。すべての人の罪の為に十字架にかかれたイエスは、同時にすべての病いも背負われた。ゆえに、イエスがすでに贖罪の業において完全ないやしをなさったので、私たちは病を負う必要はなく、すべての人が完全な健康であることを神は望まれているのだという主張である。

エリクソン(2005)は『キリスト教神学第3巻²⁵』においてこの問題についてさらに詳しく考察している。それによると、A.B.シンプソンらによる「いやしは罪の赦しおよび救いと同様に、贖罪のうちに見いだされる」とする見解は、20世紀になってから、聖霊の賜物の回復と霊的いやしの奇蹟を他のキリスト教よりも強調する、ペンテコステ・カリスマ運動、および第三の波の運動によってさかんに提唱されてきたものである。その特色の一つは、世界における病気の存在は墮落の結果もたらされた呪いの一部であるとする考えである。それゆえ、病気は霊的起源をもっているため、霊的な手段、すなわちキリストの贖罪のみわざによって戦わなければならない。キリストの死は、罪による罪責だけでな

²³ 前掲書 248 頁

²⁴ 前掲書 246 頁

²⁵ ミラード・J・エリクソン, 『キリスト教神学第3巻』, いのちのことば社(2005), 448-455 頁参照

く病気もカバーする。それゆえ、からだのいやしも偉大な贖いによる権利の一部であると主張する。そしてこの見解を支持するために、先の聖句(マタイ 8:17、イザヤ 53:4)が引用される。

エリクソンは、罪に対する呪いについての聖書の描写は明確であり、人類の間に見られる病気や疾病を含む問題の起源を墮落にあるとするのは理にかなっているとするが、イエスによる肉体の病気のいやしと罪の赦しとの間に本質的な関係があるのかという問いについては、原語の意味分析の結果としてそれほど強い結びつきはみられないと結論づけている。イエスは病気を、本質的に個人の罪への刑罰であるとは考えていない。その上で、イザヤ 53:4 の最も妥当な解釈は、預言者は現実の肉体的、精神的病気と苦悩について述べているが、それらを身代わりに負うことは必ずしも述べていないとするものである。マタイによるこの節の引用も、導き出される意味は非常によく似ているものであるとし、次のような見解を提示している。

「マタイもイザヤも、罪よりむしろ、実際の肉体的病と精神的苦悩について述べているのではないか、ということである。ただし彼らは、これらの病を身代わりに負うということは考慮していない。もしこれが正しい解釈ならば、イエスは贖いをささげることよりも、受肉することによって「私たちのわずらいを身に受け、私たちの病を背負った」ことになる。地上に来ることにより、悲しみ、病、苦しみを含む我々がここで見いだす状況そのものの中に入ったのである。病と悲しみをご自身で経験し、また人間の苦しみにご自分が経験したもものとして同情したので、この人生の悲惨さを軽くさせたいと心を動かされたのであった。²⁶⁾

3. 5 苦難の意味

では、人が病気や苦難を経験することは神のみこころなのか。なぜこの世にはこれほど多くの苦難があるのか、という問いは、神学者が古くから取り扱ってきた問題のうちの最も難しい問題の一つである。人間は基本的に、人生における苦難に意味を見出したいと願うものである。そうした苦難に何の意味もないと信じることは難しい。人々は「なぜわたしが」という問いに対する答えを探し求めている。ブラック教授は、「それは神の意志による」という解釈に立った伝統的なキリスト教の説明のどれもが、神学的不整合を生み出し、一般会衆や障害者たち、特に愛する人々に対して混乱したメッセージを与えるものだと主張している。「障害が神の意志の一部であるに違いないというこれらの説明に従えば、両親や家族、それに障害者たち自身は、神は人に障害を与えながらも愛に満ちた存在であるという信仰と徹底的に戦うよう強いられている。」

マクナット(1978)はいやしの祈りについての経験と理論をまとめた著書『いやしのみ力²⁷⁾』の中の、「癒しにかかわる神のみ旨は何か」という章において、キリスト者が病気を、墮落の結果である一種の呪いであるというよりは、むしろ祝福とみようと努める時には、何かが潜在意識の中で謀反を起こすと述べる。病気は決して祝福ではない。神によって送られた祝福は、病気ではなくて病気を

²⁶⁾前掲書 453-454 頁

²⁷⁾フランシス・マクナット、『いやしのみ力』、ヴェリタス出版社(1978)

癒すため神によってつかわされたお方、すなわち神のひとり子イエスである。しかし、病気からの究極の解放は死後まで起こらない。我々ができる限り多くの癒しをもたらそうと努めても、病気はやはりあるだろう。今でさえ、神の癒しの力は顕されつつあり、神の王国は既にここに在るが、しかしそれは十分に達成されていない。我々が今、持つものは保証であり、御霊の頭金、初ものの果物である。神が「人の目から涙を全くぬぐいとして下さる」時は、ただ新しい天と新しい地が存在するときである。「もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである。(黙示録 21:4)」ある人に癒されるようには思えない事実があっても、それは単に「まだ」癒されないのであって、何もことさらに私を心配させるものではない、と述べている²⁸。

カルペッパーは、苦難のしもべとしての役割を果たしたイエスの姿から、新約聖書の思想は、苦難の原因を探るという後ろ向きの方角ではなく、苦難を肯定的にもちいるという前向きの方角を向いているとして、(ヘブル 5:8、12:5-11)を根拠に、苦難の教育的価値を認めている。しかし、だからといって苦難はすべて神からのものだとか、この上ない祝福であるとしたりして、苦難を高く評価すべきではないとする。医者や科学者が病気を恐るべき敵として、それを根絶するために生涯を捧げているのに、教会が病気を歓迎すべき友として賛美するようなことはゆるされない。私たちは、医者や科学者と協力して、霊的な面から病気との戦いに当たるべきだと述べている。教会は当然医療の業にも関わっていくことになる。競争相手ではなく、いやしのチームの一員として。それによって神のいやしの力が働き、人々に解放や回復がもたらされるのである。

マクナットはまた、苦難と病気を区別して考えることの大切さにも言及している。「キリストの約束した苦難とは、正しい人に襲ってくる迫害であった。献身生活の試みや困難と同様、外部から加えられた苦難、憎悪、拷問である。枕する所もないことや、疲労や眠れない夜々や長い旅等。しかし、イエスは病気が人の魂や肉体を喰い荒らしているのを見られた所ではどこでも、それをご自分の敵と見なし、癒された。つまり、苦難はキリスト者の天職に付属するものとして提供されるが、しかし病気は——人間存在の内的障害により惹き起された特殊な苦難である——約束されていないのみならず、全く反対に、その癒しこそが約束されている。²⁹」

はたして、ある人に現実に起こっている病気を、苦難という概念から切り離して考えるということが可能であるかどうかという疑問は残るが、少なくとも、人生に起こってくる様々な「病い」に対し、私たちは第一に「それが神の意志である」と考える必要はない。くり返しになるが、神は私たちをあわれもうと待っておられるお方である。苦しみの中で私たちが見出すものは、私たちの姿を天の上から傍観する神ではなく、苦しみの中を歩む時、私たちのそばにおられ、苦難に立ち向かう力をあたえてくださるお方である。そうして私たちはどんな状況の中にあっても、「キリストのいやし」を体験することができるのである。

²⁸前掲書 131-134 頁 参照

²⁹前掲書 135 頁

3. 6 エリクソンのまとめ

キリストの贖罪の範囲について論じた章の最後に、エリクソンはこう締めくくっている。

「要約すると、イエスは」地上での宣教の問いやしを行い、今日もいやしを行う、ということである。ただし、そのいやしは、イエスが我々の罪を負ったのと同じ形で我々の病を身代わりに負ったことの証明または適用であると考えてはならない。むしろ、イエスのいやしの奇蹟は、他の奇蹟と同様に、単に自然の領域に超自然的な力を導入することである。もちろん、一般的な意味において、贖罪は墮落のすべての影響を無効にするものである。しかし、恩恵のうちのあるものには、終末の時まで実現されないものもある(ローマ 8:19・25)。それゆえ、いやしが罪の赦しと同じように、どんな場合にも求めに応じて与えられるとは限らない。パウロ自身この教訓を学んだのであり、(Ⅱコリント 12:1・10)、我々も学ぶ必要がある。いやしがつねに神の計画とは限らない。我々がこの地上のからだで永遠に生きることは意図されていないことを知る時(ヘブル9:27)、この事実が我々を悩ますことはなくなる。³⁰⁾

³⁰⁾エリクソン,前掲書 454-455 頁

第4章 おわりに

A さんとの出会いからはじまったこの「いやし」をめぐる考察は、この論考を通して私がたどり着きたいやしについての基本的理解が、カルペッパーやエリクソンのそれと基本的な線で一致をみたことで、一応の終着点を迎えたように思う。それは、いやしの基盤はすでに完成されたキリストの贖いではなく、私たちが愛するあまり受肉され、この地上を歩まれ、実に十字架の死にまで従われたお方の、愛とあわれみの心に求められるということだ。私たちが神にいやしを求める時、それは権利を主張することではなく、神の恵みを期待することである。主権は神の側にある、そして私たちにとって喜ぶべきことは、神は「良いお方」であるということである。私たちの義ではなく、ご自分のあわれみのゆえに私たちが救ってくださるお方(テトス3:5)である。私たちは未来において、新しい完全な身体をいただくことが保証されている。そしてその時、すべてのキリストにある者たちが、完全ないやしを受け取るのである。であるならば、今日私たちに第一に求められていることは、この神の愛と救いの知らせを伝えることである。そして苦しみの中にある人々に寄り添い、それぞれの必要を聞いて、「いやし」を与えてくださるお方に共に祈り求めることである。こうして私たち教会は、現代において、「キリストのいやし」をもたらす存在となることができるのである。

参考資料

■ 参考文献

- [1] 尾形守『聖霊の第三の波とリバイバル』ホープ出版(1995)
- [2] R.H.カルペッパー,『カリスマ運動を考える』,ヨルダン社(1978)
- [3] ミラード・J・エリクソン,『キリスト教神学第3巻』,いのちのことば社(2005)
- [4] キャシー・ブラック,『癒しの説教』,教文館(2008), (Kathy Black, 1996, “A Healing Homiletic Preaching and Disability”, Abingdon Press)
- [5] 河野克也「マルコ福音書における癒しと救い物語批評の視点から」,『福音主義神学39号』(2008)23-47頁,
- [6] 内村鑑三,『内村鑑三全集14』,岩波書店(1981)
- [7] 宇田進「全人(The whole person)のいやしへの接近」,『聖書と精神医学—全人的いやしへのステップ(共立モノグラフ No. 5)』,いのちのことば社(1993)
- [8] 高木慶太,テモテ・シスク,『今日における奇蹟 いやし 預言』,いのちのことば社(1996)
- [9] ドナルド・A・マックギャブラン「神癒と教会成長」C・ピーターワグナー編集『現代のしるしと不思議』,生ける水の川(1992)
- [10] ジョージ・E・ラッド,『神の国の福音』,聖書図書刊行会(1967)
- [11] ポール・トゥルニエ,『聖書と医学—ある医師の臨床体験の中から』,聖文社(1989)
- [12] フランシス・マクナット,『いやしのみ力』,ヴェリタス出版社(1978)
- [13] ジョン・ウインバー,『力のいやし』,マルコーシュ・パブリケーション(1994)
- [14] ジョン・ウインバー,『力の伝道』,暁書房(1992)
- [15] アンドリュー・マーレー,『キリストのいやし』,いける水の川(1976)
- [16] チャールズ・クラフト,『あなたの心の傷がいやされるために』,プレイズ出版(1995)
- [17] チャールズ・クラフト,『力あるキリスト教』,新生出版社(1994)

KBI 三年生論文評価

論文タイトル: 福音書における「いやし」

学生名: 伊佐治 洋平

指導教師名: 安黒 務先生

評価(5段階): 5

講評:

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください」(ルカ 23:42)。十字架上の犯罪人は最後の、最後の瞬間に救われた。伊佐治神学生の論文はまさにそのような論文である。それは卒業式の直前に仕上がった。しかし、それは「強盗の信仰告白」のように歴史に残る「いやし」に関する信仰告白となった。

この論文の概要は、Aさんという身近な方との「接点」から書き始められ、①「いやし」に関する今日の神学的状況と動向に関する分析と情報を提供し、②「いやし」に関する注目すべき問題点と主要な争点を指摘し、③ペンテコステ・カリスマを含む福音主義を標榜する諸教会の福音理解と聖書解釈における「いやし」の理解を確認し、それに関するより一層の掘り下げの一つの呼びかけと、そのための材料を提供している。そう、きわめて説得力のある優れた論文であり、高評価に値する論文である。

さて、エリクソン著『キリスト教神学』を教え、「オウム返ししかできないような弟子は最悪の弟子である」と教えてきた。つまり、ローザンヌ誓約解説に「教会が直面する諸問題は、基本的には常に神学的である。それゆえ、教会は神学的に考えることを身に着けることによって、キリスト教的原理をすべての状況に適用できるような指導者たちを必要とする」とある通りである。

伊佐治神学生は、「いやし」というジャンルに“キリスト教的原理”を突き詰めて適用することに取り組み、最後の瞬間まで妥協することなく奮闘してくれた。論文は、ボクシングの試合と同様、最後の一ヶ月、最後の一週間、最後の日、最後の一時間、最後の一分一秒が勝負である。ゴングが鳴る瞬間まで勝敗の帰趨は分からないのである。

振り返ってみるのに、この論文は、仲井神学生の『ディスペンセーション主義終末論の克服』という歴史的論文に並ぶ論文である。仲井論文は広く読まれる論文となった。伊佐治論文も、KBI神学生、関係諸教会、そしてその領域を超えて、「いやし」の問題で光を求めている多くの人に読んでいただく価値のある論文に仕上げられたと思う。このような論文を執筆しうる神学的素養、神学的見識を身につけられた伊佐治神学生は、将来神の栄光をあらわす優れた器として用いられるであろう。つまり、神学校で一番大切なものを身につけられたということである。そして、この論文を書き上げた瞬間、伊佐治神学生の心にはルカ 23:43 の御声が響き渡ったのではないか。そう思うのである。